矢吹町中町第一災害公営住宅

旧街道沿いの大きな軒空間と とおり庭が住民と地域の交流の場となる（手前は中町第一区自治会館）

軒空間は縁側のようなテラス空間でとおり庭と住戸を緩やかにつなぐ

木質化された軒空間の適度な複雑さが人とモノをつなぐ

居住空間のよりどころとなる集成材厚板パネルの壁柱

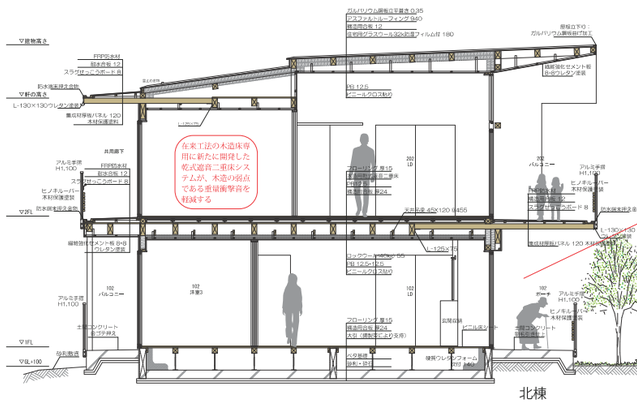
軒空間と住戸からもれ出る温かな光がとおり庭を彩る

宿場町の記憶を伝える木の景観形成 ～ 大きな木の軒空間

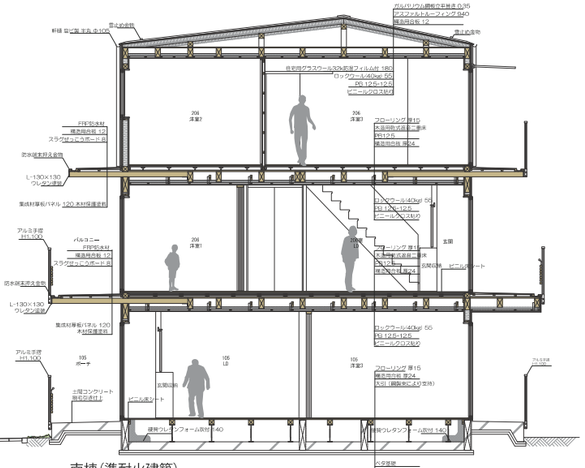
私たちが復興まちづくりに関わってきた福島県西白河郡矢吹町の、木造による災害公営共同住宅の計画である。災害公営共同住宅は原則 RC 造だが、東北地方の RC 造建設コストの高騰で計画が進まない状況を鑑み、地元ビルダーで建設可能な木造を提案した。在来の軸組に新技術の集成材厚板床パネルを組み合わせた新しい構法が特徴で、豊富な県産材を大量消費して地域の山・林業・産業に貢献しつつ、地域の技術活用とスキルアップを図った。
集成材厚板床パネルの高い剛性を活かした大きな「木の軒空間」は、旧奥州街道沿いの宿場町であった敷地に新たな木の景観を形成しつつ、地域の小さな公共空間を作り出す。「木の軒空間」は住戸のテラスへと続き、2 つの住棟間を貫く「とおり庭」と、ガラス引戸の玄関からリビングアクセスするオープンな構えの住戸との交流の場となって、長らく仮設住宅で暮らした住民の良好なコミュニティ形成を促す。

木のデザインの可能性 ～ 人とものをつなぐいきいきとした「許容するデザイン」

建築外周のテラスや庇に新技術の集成材厚板床パネルを使い、高い剛性を活かした大きな軒空間（面材）を実現。小さく分節された木の外壁（面材）や、木の防雪ルーバー、配管カバー格子（線材）を分散配置して、適度な冗長さと複雑さを持つ奥行き感のある「木のファサード空間」を作り出す。ここに生活が猥雑に溢れ出すことで、人とものと建築が混然一体となる縁側のような生活空間の魅力が醸し出されるようになる。
これからの時代に必要なのは、モダンデザインが持つシャープで抽象的なかたちではなく、また伝統木造の繊細で技巧の粋を尽くした造作でもない、木の多様性が人とものを繋ぎいきいきとした活動を喚起する「許容するデザイン」だと考える。

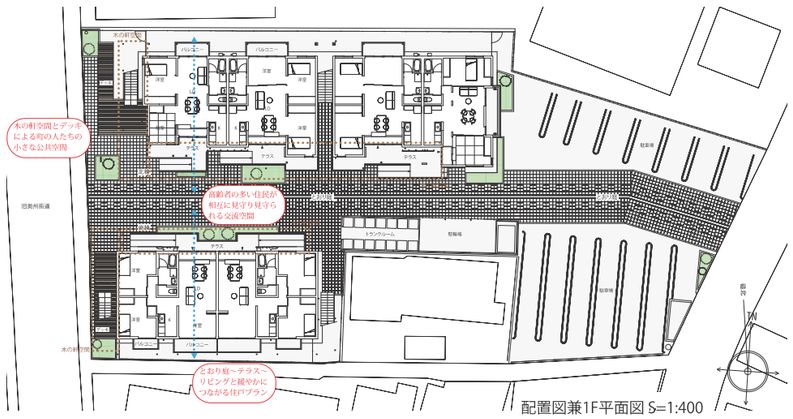


北棟

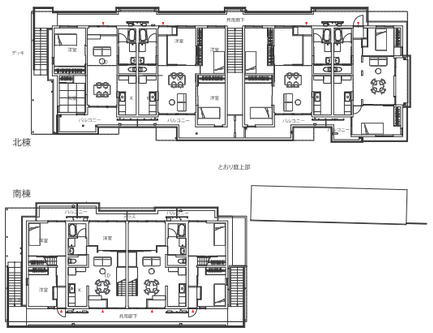


南棟（準耐火建築）

断面詳細図 S=1:100



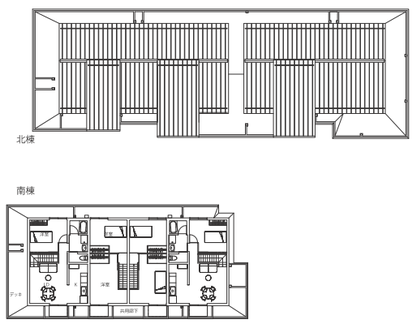
配置図兼1F平面図 S=1:400



北棟

南棟

2F平面図



北棟

南棟

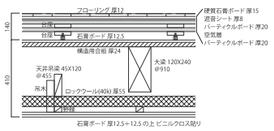
3F平面図

集成材厚板床パネル（準耐火認定部材）

集成材厚板床パネルは厚さ 120mm 幅 450mm、雇い実とビスで接合して大きな水平構面を形成できる準耐火認定部材（床）で、今回の材種は県産スギ。

準耐火構造が要求される「木三共」でも大きな跳出し床を木あらわしで作ることが可能で、その特徴を活かした「大きな軒空間」が建築の特徴をなっている。

木造用乾式遮音二層二重床の新規開発



石膏ボード厚12.5+12.5のとビニルクロス貼り

木造共同住宅の床遮音問題を解決するため、在来工法床専用の「木造用乾式遮音二層二重床」をメーカーと共同で新規開発、重量・軽量衝撃音のどちらにも良好な結果を得た。

向かいの中町第一区自治会館より見る

街道沿いに展開する木質化された公共空間

適度な冗長さと複雑さで配置された木材

2 階テラス

大きな軒空間

とおり庭から見た夜の軒空間

とおり庭とテラス

高天井が特徴の北棟 2F リビング

北棟 1F 住戸よりテラス～とおり庭を見る

南棟 3F メゾネット住戸